根　来　寺　坊　院　跡

――― 大谷川改修工事に伴う発掘調査 ―――

１９９５年１０月

㈶　和歌山県文化財センター

例　　言

1．本書は大谷川改修工事に伴う根来寺坊院跡発掘調査の概要である。

2．発掘調査は和歌山県土木部より和歌山県文化財センターが委託を受け実施した。
調査対象地は2ヶ所、面積は約267㎡である。現地調査の期間は1995年6月19日から同年8月18日までで、その後応急整理を行い概報を作成した。

3．調査ならびに本書で使用した座標地は国土座標第Ⅵ系のもので、図示した北は座標北、標高は東京湾標準潮位（T．P．＋）の数値である。

4．調査にあたっては宗教法人根来寺の協力を得た。また、本書の作成にあたっては図および図版作成に栗山以殊美・亀井　淳の助力を得た。記して謝意にかえさせていただく。

5．発掘調査並びに本書の作成は、文化財センター主査　村田　弘が担当した。

目　　次

例　言　・　目　次
Ⅰ　位　置　と　環　境……1
Ⅱ　調　　査……2
　a　A区の調査……3
　b　B区の調査……4
Ⅲ　ま　と　め……5

図1　遺跡の範囲……1
図2　調査区位置図……2
図3　A区遺構平面図……3
図4　B区遺構平面図……4
図5　遺物実測図……5
写真1　作業風景……2
図版1　A区調査前・A区東半部……6
図版2　A区西半部・A区SD－01……7
図版3　B区調査前・B区東半部……8
図版4　B区西半部・西南隅盛土状況…9
図版5　出土遺物……10

Ⅰ　位置と環境

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は和歌山県の北部、紀ノ川北岸の山間の地に所在する。平安時代の末期、興教大師覚鑁によって開創された寺院であり、中世を通して教学の隆盛を誇った。

最盛期の15・16世紀には山内に二千とも三千ともいわれる坊院堂舎が建ち並び、当時の日本の中でも最も裕福で豪華な寺院であったと言われている。

それとともに戦国時代の末期には多数の僧兵を擁し、また、いちはやく鉄砲の導入をはかるなどして軍事的にも勢力を増大させ、畿内の戦局に多大な影響を与えたことが知られている。

このように繁栄を誇った根来寺も、天正13年（1585）豊臣秀吉による根来攻めにあい全山が焼き討ちされ、大塔や大師堂など２、３の建物を残し、すべて灰塵に帰してしまった。

その後、江戸時代に入ると紀州藩の庇護もあり徐々に再興されるが、往時の勢力にはほど遠い状況であった。

昭和51年以降、山内では発掘調査が継続して実施されているが、これらの調査からおびただしい数の遺構・遺物が検出されており我が国屈指の中世の寺院であったことが判明している。

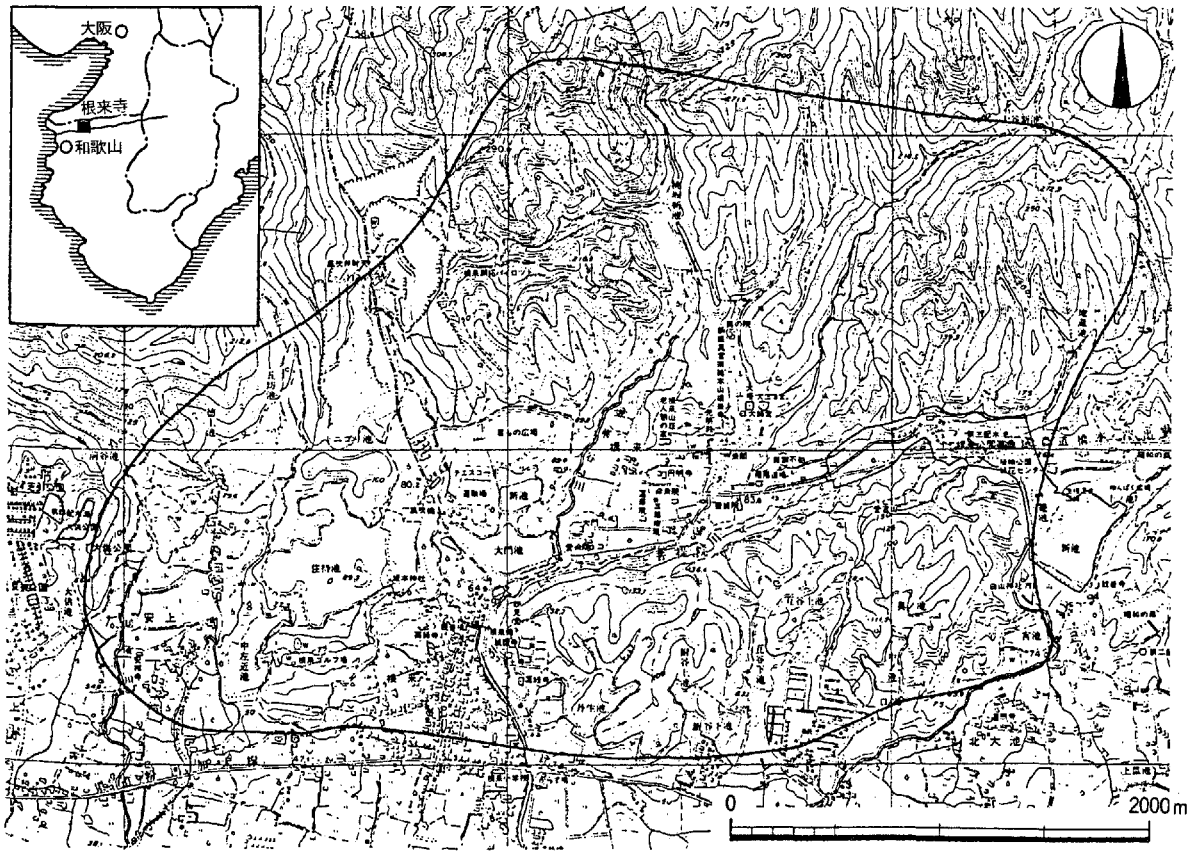


図１　遺跡の範囲

Ⅱ 調　　査

本調査は、根来山内を流れる大谷川の改修工事に伴う発掘調査である。調査地点は、現存する国宝の大塔の南、およそ100mのところであり、山内のほぼ中心地と言える場所である。しかしながら図2にも図示したように、調査地点は、山内を深く抉って流れる大谷川の断崖に接しており、塔頭などが占地するには条件の悪いところと言えよう。事実、後述するが、今回の調査においては、塔頭などの建物跡はまったく検出されず、わずかに素堀りの溝を一条検出したにすぎなかった。

写真　1　作業風景

調査地は、大谷川をはさんで2ヶ所あり、このうち左岸をA区、右岸をB区と仮称している。調査対象面積は、267㎡であるが両区とも桜・楓などの樹木が植えられてお

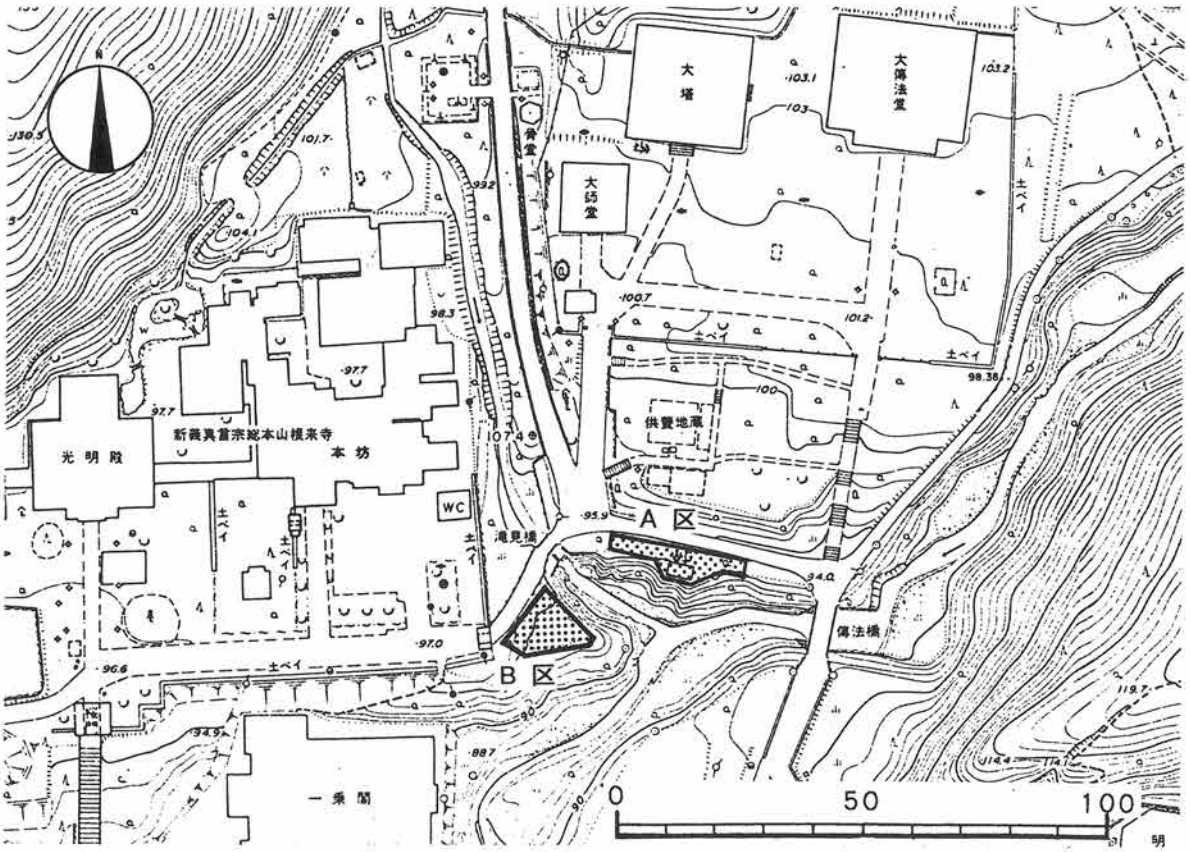


図2　調査区位置図

り、調査はこれらの間隙を縫って行わざるを得なかった。したがって実際の調査面積はその分少なくなっている。また、土置場の関係で調査は反転して実施した。このため、遺構写真については東・西と分割して掲載しているが遺構平面実測図については各々を接合して載せている。以下、各区について概述する。

a．A区の調査

A区は、大塔および本坊への参道の南脇にあたる地区である。ここにはかつて公衆便所が建てられており、調査区内の一部は、その基礎により攪乱を受けていた。

調査区の南側は、そのまま大谷川の断崖となっていて、急激に落ちこんでいる。

現況の地表面から15cmほどが表土（腐食土）で、参道に近い側ではすぐその下に細かな礫を含む良く引き締まった面が確認できた。この面は現有のコンクリート敷きの参道がつくられる以前の参道の路面と考えられるもので、時期的には、つい近年のものである。

その下には、黄茶色の盛土と思われる土が堆積していた。この盛土は均一なものではないが、基本的には地形に沿うかたちで川側に押し出すように盛られており、参道側では薄く30cm、川側の深いところで1mほどとなっていた。

この盛土の中からは近・現代の陶器片も出土しており、かなり新しい時期に整地されたことが窺われる。

確認した遺構としては、幅40cm、深さ20

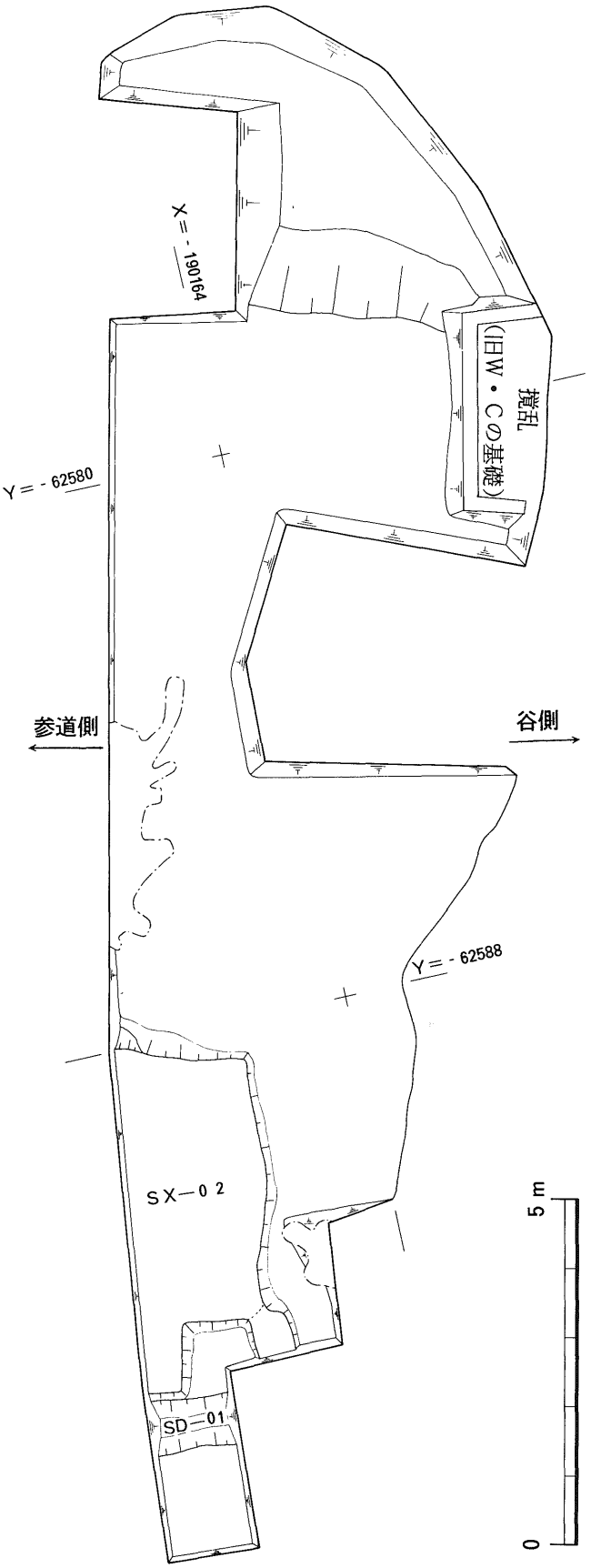


図3　A区遺構平面図

cmほどの溝(SD－01)がある。この溝はほぼ南北方向に流れるもので、石積みなどはなく、素掘りの状態であった。埋土からは、中世の土師質皿の小片のみが出土しており、この遺構については、中世のものである可能性が高い。他には、土壇(SX－02)がある。ただし、これについては、岩盤を意識的に削り出したものか、自然地形なのか判然としない。前者であれば北側、現有参道の下に延びて行き、一辺５ｍほどの方形状の基壇のようなものになる可能性が考えられよう。

ｂ．Ｂ区の調査

本区は、大谷川の屈曲部に張り出した三角形状を呈する平坦面である。ここでは、遺構はまっ

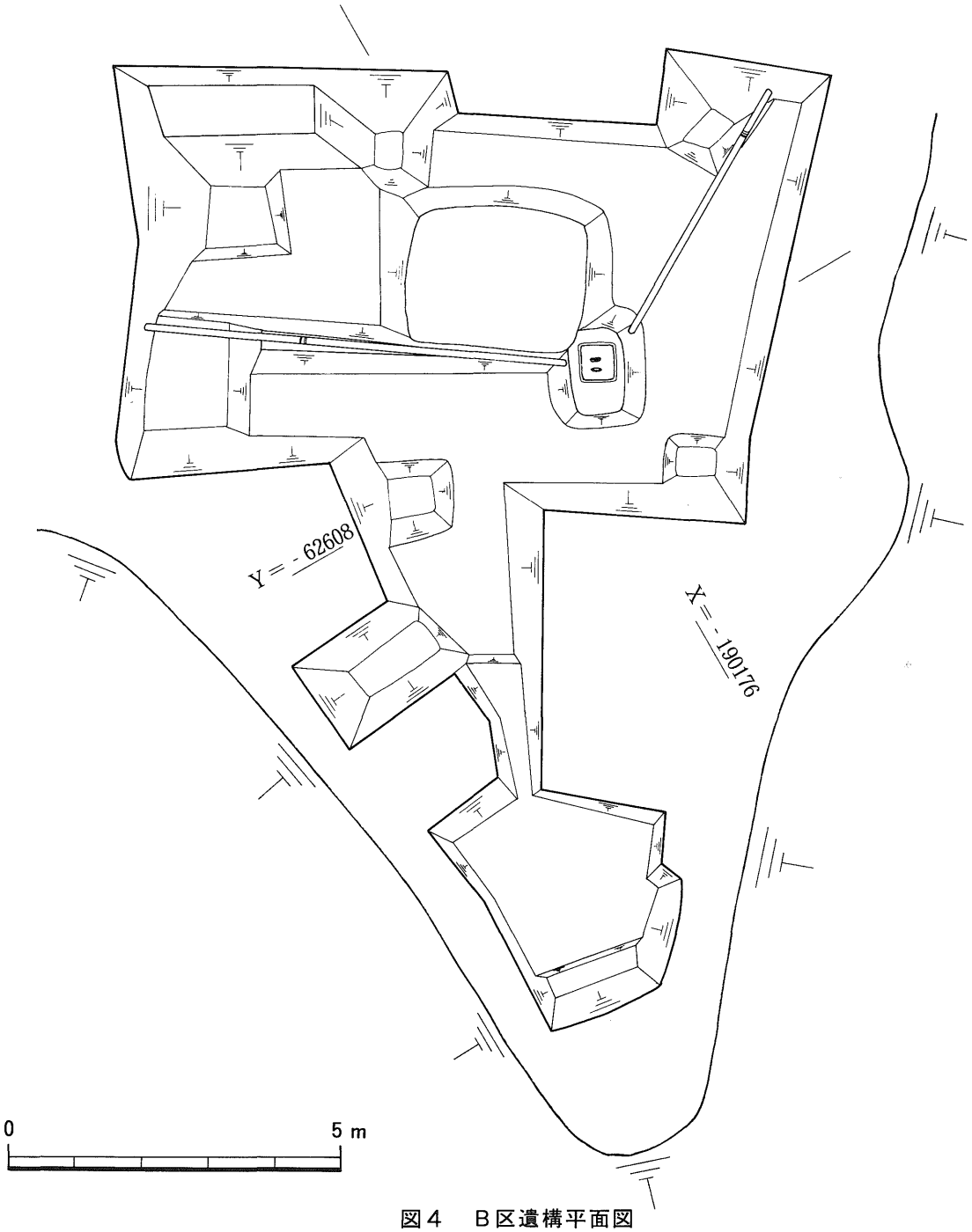


図４　Ｂ区遺構平面図

たく検出されなかった。調査区全域に西側から押し出すように厚く土が盛られており、最深部で2.5mまで掘り下げたが地山に達しない状況であった。この盛り土の中には中世、16世紀代の遺物も含まれるが、近世以降、近代までの遺物が混在していた。このことから、ごく新しい時期に――――――おそらく付近の本坊の増改築などにともない大きく地形の改変がなされたものと考えられる。

Ⅲ　ま　と　め

今回の調査では、中世のものと考えられる溝を1条検出したにとどまり、建物跡などの主要な遺構についてはまったく検出することができなかった。このことは、先述したように調査地が川の両岸、崖っ淵という地形上の理由によるものであり、かならずしもこの付近に塔頭などが存在していなかったことを示すものではないであろう。むしろ遺跡の中心部であることからこの付近には大塔・伝法堂などに伴う諸施設の存在が想定されてしかるべきと考えている。ただ、今回の調査で確認されたように、この付近は近世以降に大幅な地形上の改変を受けている可能性が高く、今後の調査にあたってはこのことを念頭に置いておく必要があろう。

遺物については、さほどの量を数えるものではないが、中で一点、須恵器の杯蓋（実測図3）が出土している。あきらかに根来寺開山以前のものであり、山内においてはきわめて珍しい出土例と言える。わずか一点ではあるが、このことも今後の調査にあたって留意しておく必要があろう。

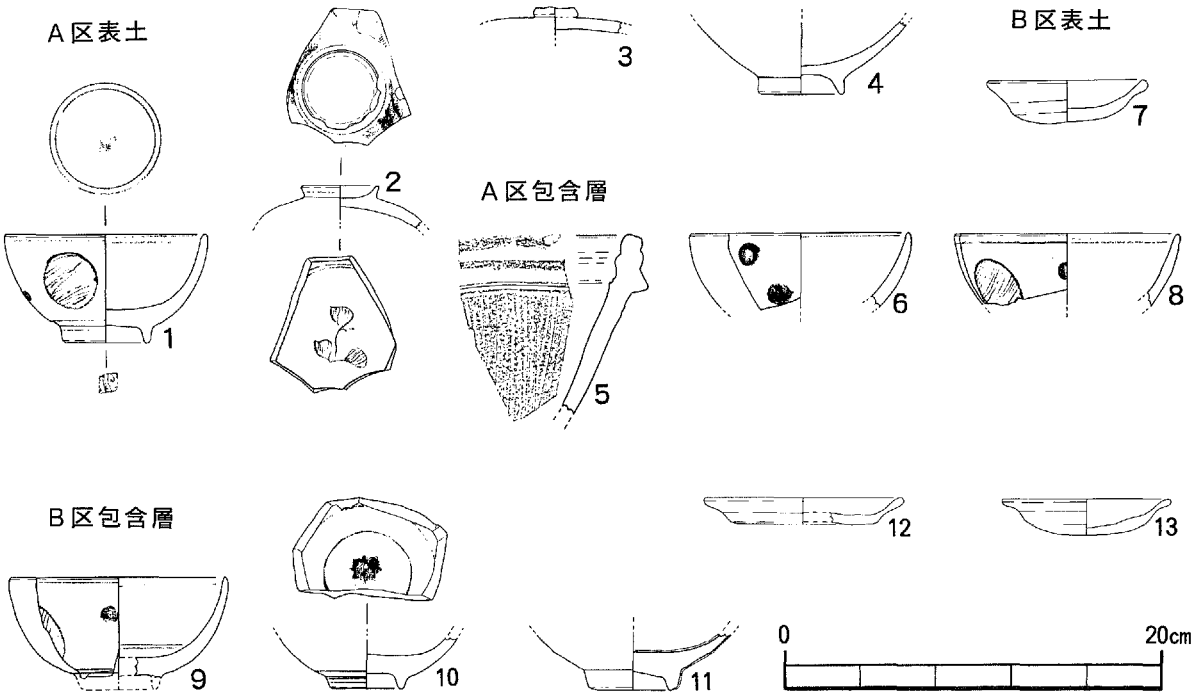
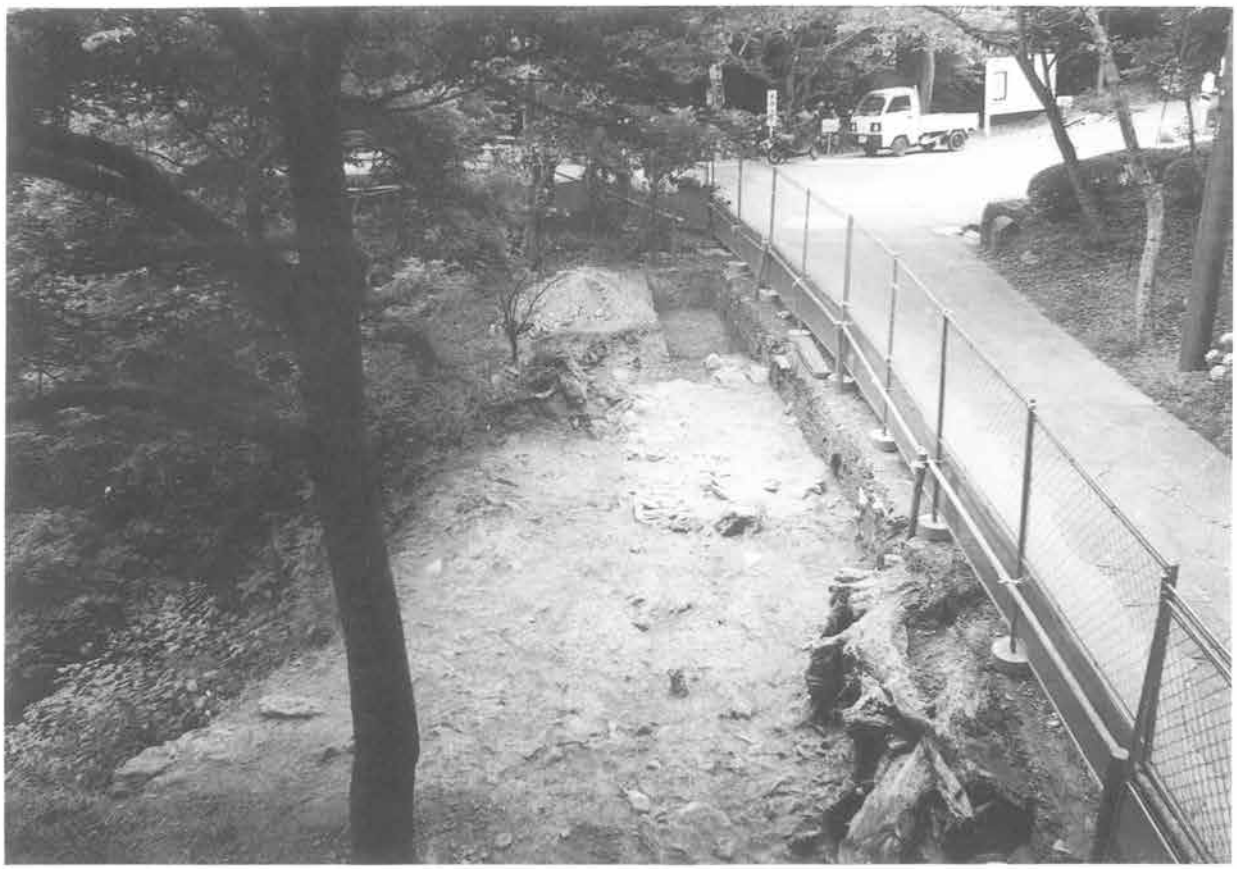


図5　遺　物　実　測　図

A区調査前景（北西から）

A区東半部（西から）



A区西半部（東から）

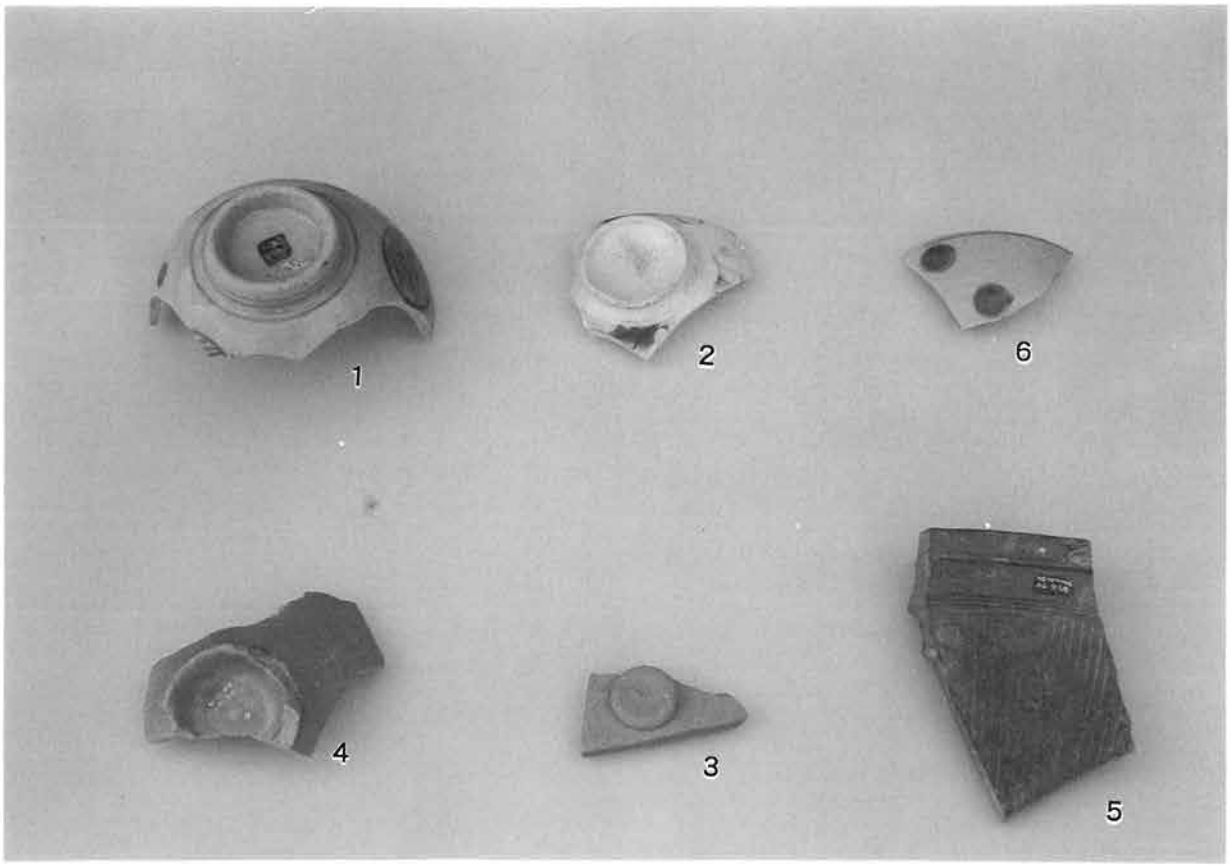
A区ＳＤ－01（南東から）

B区調査前景（西から）

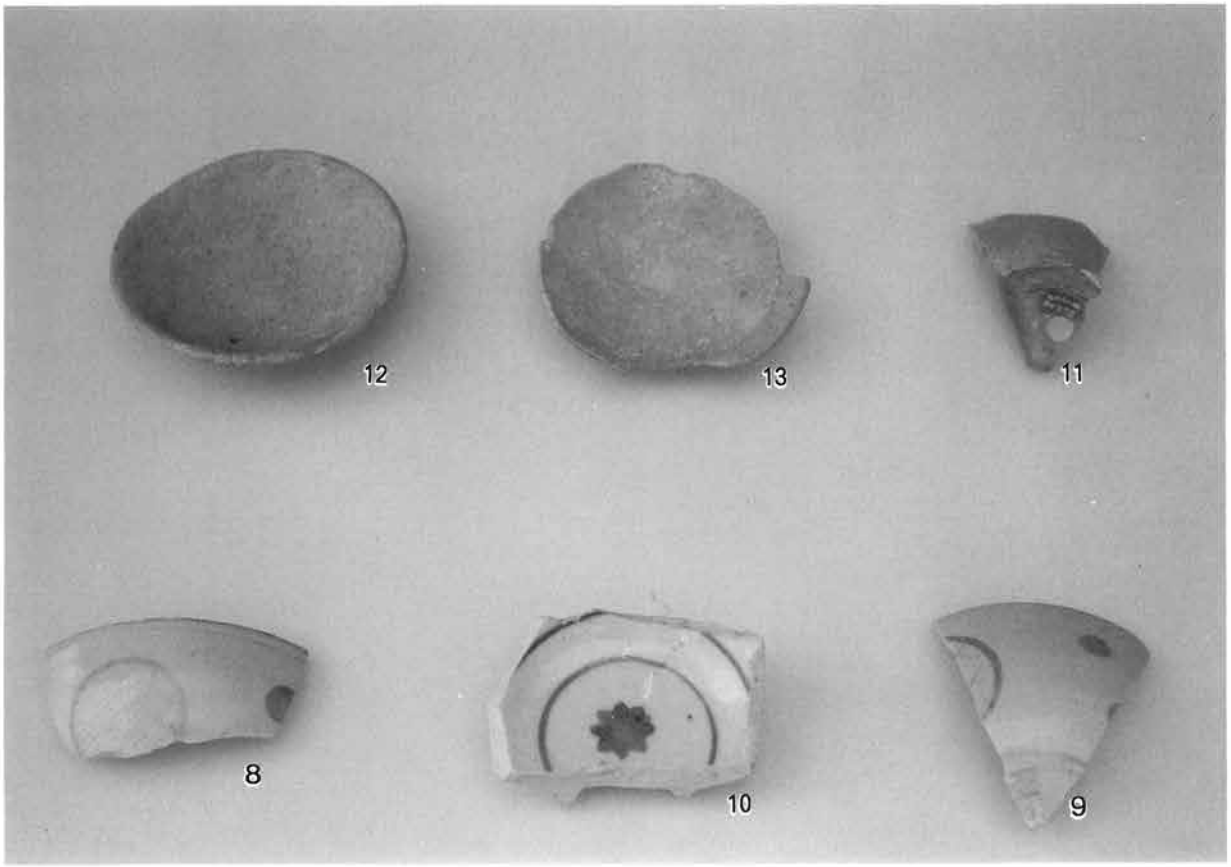
B区東半部（西から）

B区西半部（東から）

B区西南隅盛土状況（東から）



A区出土の遺物



B区出土の遺物

報告書抄録

ふりがな	ねごろてらぼういんあとはっくつちょうさがいほう
書名	根来寺坊院跡発掘調査概報
副書名	大谷川改修工事に伴う発掘調査
編著者名	村田　弘
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640　和歌山県和歌山市広道20番地　TEL　0734－33－3843
発行年月日	西暦　１９９５年１０月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ねごろてらぼういんあと 根来寺坊院跡	わかやまけんながぐん 和歌山県那賀郡 いわでちょうねごろ 岩出町根来	32670	16	34度 17分 16秒	135度 19分 12秒	1995.6.19 ～ 1995.8.17	267㎡	大谷川改修工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根来寺坊院跡	寺院跡	中世～近世	溝　１条	瓦 土師器 近世陶磁器	無し

根来寺坊院跡

大谷川改修工事に伴う発掘調査

１９９５．１０

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷　有限会社　土屋総合印刷